

街中での異性への話しかけへの態度 —行為者の印象，パーソナリティ，行動意図との関連—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 仲嶺 真

筑波大学人間系 松井 豊

The attitudes toward approaching an unknown opposite-sex person in town: Relations to impressions of approaching person, personality, and behavioral intention

Shin Nakamine (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan*)

The purposes of this study are to examine attitudes towards approaching unknown persons of the opposite-sex in town and the relations between the attitudes, impressions of the approaching person and their personality. The results from a pilot survey indicated the presence of both positive and negative attitude factors. Based on pilot-study results, a scale of items was prepared and administered in the main study. The results indicated that attitudes towards approaching unknown persons of the opposite-sex in town consist of two factors; namely, aversion for approaching someone and opportunity to initiate a relationship. The results suggest that these two factors are generally consistent with expectations in terms of their influences on the impressions of approaching people and personality, which indicates the validity of the attitudes, highlighted in this study.

Key words: attitude, approaching, opposite-sex

問 題

日本人女性の約7割は、明らかに性的な誘いを意図した初対面の男性から、街中で話しかけられた経験がある (Sakaguchi & Hasegawa, 2007)。そのような話しかけは、犯罪の発端となりうる指摘されており (坂口, 2012)、若い女性にとってネガティブな経験となる (Clark & Hatfield, 1989; Sakaguchi & Hasegawa, 2007)。一方で、街中での話しかけが異性交際や結婚のきっかけになりうる場合もある (国立社会保障・人口問題研究所, 2012a, 2012b)。

街中での話しかけが、性的な誘いを意図したものであるにせよ、異性関係構築のきっかけとなるにせよ、話しかける側は話しかけられる側を異性として意識しているという部分には共通性があると考えら

れる。本研究では、そのような“異性として意識した初対面の相手に話しかけること”が街中で行われる場合に着目して検討を行う (以下、街中での話しかけと略す)。

上述したように、街中での話しかけには、犯罪の発端となりうるという側面と、異性関係構築のきっかけとなりうるという側面が存在する。しかし、街中での話しかけが、実際にそのような2側面で捉えられているのか、すなわち、街中での話しかけに対する態度がどのような構造をもつのかについては、検討がなされていない。計画行動理論 (Ajzen, 1991) によると、態度は行動意図を介して行動を規定する。この理論を参考にすれば、行動の予測因の一つとして、街中での話しかけへの態度を検討することは重要であろう。そこで、本研究では、第一の

目的として、街中での話しかけへの態度の構造を検討する。

また、第二の目的として、本研究で測定される街中での話しかけへの態度が妥当性を有するかを確認するため、街中での話しかけの行為者に対する印象と街中での話しかけへの態度との関連を検討する。行為者に対して、否定的な印象をもつ人は、街中での話しかけに対して否定的な態度を有し、肯定的な態度を有しにくいであろう。一方で、行為者に対して肯定的な印象をもつ人は、街中での話しかけに対して肯定的な態度を有し、否定的な態度は有しにくいと考えられる。

加えて、本研究では、街中での話しかけへの態度とパーソナリティ（一般他者への愛着スタイル、行動抑制システム・行動接近システム（BIS / BAS: Behavioral Inhibition System / Behavioral Approach System））との関連についても検討する。

一般他者への愛着スタイルは、ECR-GO (the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version) を用いて測定され、親密性回避 (Avoidance) と見捨てられ不安 (Anxiety) の2次元で構成される (中尾・加藤, 2004)。Rholes & Simpson (2004 遠藤・谷口・金政・串崎監訳 2008) によると、Avoidance は、心理的親密性に対する不快と心理的独立性を維持しようとする欲求によって大部分が規定される一方、Anxiety は、アタッチメント対象からケアと注意を求めようとする強力な欲求と、そうした欲求にアタッチメント対象が応じ得るだけの力があるのか、あるいは応じようとする意思があるのか、といったことに関する深く広範な疑念とが結びついたものと考えられる。街中での話しかけと Avoidance との関連を予測すると、どのような態度を有しようとも、街中での話しかけによって心理的親密性がもたらされることはなく、また、心理的独立性を維持したいという欲求が阻害されることもないため、Avoidance と街中での話しかけへの態度との間には関連がみられないであろう。また、街中での話しかけに対する否定的な態度とは、街中での話しかけは犯罪の発端となりうるなどの態度であり、話しかけをする人からケアが求められないことを意味する。Anxiety は、ケアを求める強力な欲求と、ケアを求めた対象が自分の欲求を満たしてくれるのかについての疑念によって規定される。そのため、Anxiety の高い人は、ケアを求める欲求が阻害される可能性のある街中での話しかけに対して、否定的な態度を有すると考えられる。したがって、Anxiety の高さや街中での話しかけに対する否定的な態度との間には正の相関関係が

みられるであろう。

BIS / BAS とは、罰ならびに報酬手がかりに対する感受性の個人差を表す (安田・佐藤, 2002)。BIS は、罰の信号によって活性化される行動抑制システム、BAS は、報酬の信号によって活性化される行動接近システムと定義され、これらを測定するための尺度が、BIS / BAS 尺度である (安田・佐藤, 2002)。BIS / BAS 尺度は、懸念・罰感受性 (BIS1)、回避ドライブ (BIS2)、抑制性 (BIS3)、接近ドライブ (BAS1)、報酬応答性 (BAS2)、新たな報酬体験の追求 (BAS3) の6因子から構成される。街中での話しかけは、犯罪の発端となりうるなどの否定的な側面 (すなわち、罰) と関係構築のきっかけとなりうるなどの肯定的な側面 (すなわち、報酬) が存在するため、罰手がかりに対する感受性の高い人は、街中での話しかけに対して否定的な態度を有しやすく、報酬手がかりに対する感受性の高い人は、街中での話しかけに対して肯定的な態度を有しやすいと予想される。そのため、BIS1、BIS2、BIS3は、街中での話しかけに対する否定的な態度と正の相関関係がみられる一方で、BAS1、BAS2、BAS3は、街中での話しかけに対する肯定的な態度と正の相関関係がみられるであろう。

上述した本研究の目的を、以下にまとめる。

第一に、街中での話しかけに対する態度の構造を検討し、それを測定するための尺度を作成する。

第二に、街中での話しかけへの態度と街中での話しかけの行為者への印象との関連を検討する。

第三に、街中での話しかけへの態度とパーソナリティ (一般他者への愛着スタイル、BIS / BAS) との関連を検討する。

予備調査

目的

街中での話しかけに対する態度は、どのような構造を有するかを探索するため、街中での話しかけに対する不快度とその理由について検討する。

方法

調査参加者 愛知県、茨城県、沖縄県、東京都内の大学に在学する女子大学生183名 (平均年齢20.14 ± 1.17歳)、男子大学生216名 (平均年齢20.93 ± 2.31歳) であった。

手続き 2012年7月、11月、12月に、集団回答形式の質問紙調査が実施され、即時回収された。質問紙配布の際は、無記名であること、回答は統計的に処理され、個人が特定されないこと、回答への協力

は任意で拒否しても不利益を被らないことを説明し、フェイスシートにも記載した。なお、本研究は、所属機関の研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

測度 以下の2つの測度を用いた。

第一は、街中で話しかける男性への快・不快理由であった。街中での話しかけを行う男性に対して感じる不快度について5件法（“1 = 不快”、“3 = どちらでもない”、“5 = 快”）で回答を求めた後、その理由について自由記述で回答を求めた。

第二は、街中で話しかけられて対応をする女性への快・不快理由であった。男性から街中での話しかけをされたときに対応をする女性に対して感じる不快度について5件法（“1 = 不快” から “5 = 快”）で回答を求めた後、その理由について自由記述で回答を求めた。

結果と考察

分析のために用いたデータは、回答の信憑性が明らかに疑われた3名分を除いた、女性182名、男性214名分のデータであった。また、欠損値は、分析から除外した。

話しかける男性および話しかけられて対応をする女性への不快度 話しかける男性および話しかけられて対応をする女性それぞれへの不快度に対する回答の割合は、以下の通りであった (Table 1)。

話しかける男性への不快度に関しては、女性の約8割は、“不快”、“やや不快”と回答している一方、男性は、“どちらでもない”と回答している人が約5割であった。また、話しかけられて対応をする女性への不快度に関しては、女性の約6割、男性の約7割が、“どちらでもない”と回答した。

話しかける男性および話しかけられて対応をする女性への不快度の理由の分類 話しかける男性への不快度の理由に対する自由記述回答を性別に分類した。分類は、内容の類似性を基準として、心理学を専攻する大学院生1名（女性）と第一筆者が合議に

より行い、カテゴリ名を命名した。

分類の結果、女性においては6個のカテゴリ（“行為者に対する積極的否定”、“話しかけに対する積極的否定”、“被行為によるデメリット”、“話しかけに対する消極的否定”、“他人事”、“状況次第”）、男性においては10個のカテゴリ（“他人事”、“話しかけに対する積極的否定”、“行為者に対する積極的否定”、“話しかけに対する消極的肯定”、“話しかけに対する積極的否定”、“話しかけに対する積極的肯定”、“状況次第”、“行為者に対する消極的肯定”、“アンビバレントな感覚”、“その他”）が生成された。女性においては、話しかけやその行為者への否定的な理由が目立つ一方、男性では、肯定的な理由も挙げられた。

また、話しかけられて対応をする女性への不快度の理由に対する自由記述回答も同様に分類を行った。

分類の結果、女性においては7個のカテゴリ（“他人事”、“対応行為者に対する積極的否定”、“状況次第”、“対応行為に対する消極的肯定”、“対応行為に対する積極的否定”、“対応行為者に対する積極的肯定”、“その他”）、男性においては8個のカテゴリ（“他人事”、“対応行為者に対する積極的否定”、“対応行為に対する消極的肯定”、“状況次第”、“対応行為に対する積極的肯定”、“対応行為に対する積極的否定”、“アンビバレントな感覚”、“その他”）が生成された。男女ともに肯定的な理由も否定的な理由も挙げられたが、話しかけられて対応をする女性に対して感じる不快度の理由としては“他人事”が多かった。

分類された話しかける男性への快・不快理由のカテゴリと、話しかけられて対応をする女性への快・不快理由のカテゴリを比較すると、上位に挙げられた理由に違いはあるものの、構造としてはほぼ同一であると考えられる。すなわち、街中での話しかけへの態度は、積極的肯定、消極的肯定、積極的否定、消極的否定、無関心の5つに大別できると考えられ

Table 1
街中での話しかけに関する不快度

	女性						男性									
	n ^{a)}	不快	やや不快	どちらでもない	やや快	快	M ^{b)}	SD	n ^{a)}	不快	やや不快	どちらでもない	やや快	快	M ^{b)}	SD
話しかける男性	180	42.9%	34.1%	20.3%	1.1%	0.5%	4.19	0.84	213	12.6%	24.3%	51.4%	8.4%	2.8%	3.36	0.91
話しかけられて対応をする女性	178	14.3%	19.2%	59.9%	3.8%	0.5%	3.44	0.81	212	6.1%	12.1%	66.8%	11.2%	2.8%	3.08	0.77

^{a)} 欠損値を除去した値

^{b)} 値が大きいほど、不快度が高いことを表す

る。無関心は、“他人事”などが主に該当するが、“他人事”はどちらかという否定的評価¹⁾であると考えられるため、街中での話しかけへの態度には、肯定的態度と否定的態度があることが確認された。すなわち、街中での話しかけが異性関係構築のきっかけになるなどの街中での話しかけを肯定的に評価するという態度と街中での話しかけは迷惑であるなどの街中での話しかけを否定的に評価するという態度が存在した。

本調査

目的

予備調査の結果に基づき、街中での話しかけへの態度の構造が、肯定的態度と否定的態度という2因子構造かを、探索的因子分析(EFA: Exploratory Factor Analysis)によって確認し、街中での話しかけへの態度尺度を作成する。加えて、作成された街中での話しかけへの態度尺度を用いて、街中での話しかけの行為者への印象、パーソナリティ、行動意図、実際の行動頻度との関連を検討する。また、街中での話しかけへの態度の時間的安定性を確認するため、短期縦断調査を実施する。

方法

調査参加者 1回目の調査(Time 1)は、茨城県内の大学に在学する女子大学生156名(うち年齢不明2名:平均年齢20.49 ± 1.61歳)、男子大学生111名(平均年齢20.61 ± 2.14歳)、性別不明3名の計270名(うち年齢不明4名:平均年齢20.54 ± 1.85歳)であった。2回目の調査(Time 2)は、同大学の女子大学生137名(平均年齢20.45 ± 1.77歳)、男子大学生91名(平均年齢20.48 ± 2.08歳)、性別不明3名の計231名(うち年齢不明3名:平均年齢20.47 ± 1.90歳)であった。Time 1とTime 2の両方に参加した調査参加者は155名(女性101名、男性51名、不明3名)であった。

手続き Time 1は、2013年6月と10月に集団回答形式で実施され、即時回収された。Time 2は、Time 1から2-3週間後に実施された。どちらの調査においても、質問紙配布の際に、調査は無記名であること、回答は統計的に処理され、個人が特定されないこと、回答への協力は任意で拒否しても不利益を被らないことを説明し、フェイスシートにも記載

した。なお、本研究は、所属機関の研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

測度 Time 1では以下の測度を用いた。

第一は、街中での話しかけへの態度であった。予備調査の結果に基づき15項目を作成し(Table 2参照)、5件法(“1=あてはまらない”、“3=どちらでもない”、“5=あてはまる”)で回答を求めた。

第二は、街中での話しかけの行為者に対する印象であった。街中で話しかけをする男性への印象として、呈示された形容詞がどの程度あてはまるかを7件法(“1=まったくあてはまらない”、“4=どちらでもない”、“7=非常にあてはまる”)で回答を求めた。形容詞は、Dating Partner Preference Questionnaire (Tombs & Silverman, 2004)と特性形容詞尺度(林, 1978)を参考に33項目を用いた。

第三は、一般他者への愛着スタイルであった。ECR-GO(中尾・加藤, 2004)の各因子から因子負荷量の高い順に10項目を選定し、計20項目を用いた。各項目に対し、7件法(“1=まったくあてはまらない”から“7=非常によくあてはまる”)で回答を求めた。

第四は、BIS / BASであり、BIS / BAS尺度(安田・佐藤, 2002)を用いた。計30項目あり、各項目に対し、4件法(“1=あてはまらない”から“4=あてはまる”)で回答を求めた。

第五は、IDであった。Time 2の回答と照合するため、任意のIDの作成を求めた。

Time 2では、以下の測度を用いた。

第一は、街中での話しかけへの態度であり、Time 1と同一であった。

第二は、話しかけられた頻度および話しかけた頻度であった。キャッチセールスのような仕事上の勧誘、単に道を尋ねられたおよび尋ねたなどを除く、街中で初対面の日本人異性に話しかけられた頻度および話しかけた頻度それぞれについて、“1=0回”、“2=1回”、“3=2-5回”、“4=6-9回”、“5=10回以上”の5つの選択肢からの単一回答で回答を求めた。

第三は、街中での話しかけに関する行動意図であった。キャッチセールスのような仕事上の勧誘、単に道を尋ねられたおよび尋ねたなどを除く、街中で初対面の日本人異性に話しかけられたいと思う程度および話しかけたいと思う程度それぞれについて、“1=まったくない”、“2=ほとんどない”、“3=ときどきある”、“4=頻繁にある”、“5=いつも思う”の5件法で回答を求めた。

第四は、IDであった。Time 1で作成したIDの記入を求めた。なお、Time 1で回答していない調査

1) “他人事”に該当する記述としては、“自分に関係ないから”、“他人のことはどうでもいいから”などが挙げられた。

参加者は、“新規”という選択肢を選ぶよう求めた。

結 果

Time 1の回答を用いた以下の分析は、回答の信憑性が明らかに疑われた5名分を除く、女性156名、男性106名、性別不明3名の計265名分の回答を用いて行った。Time 2の回答を用いた以下の分析は、回答の信憑性が明らかに疑われた2名分を除く、女性137名、男性89名、性別不明3名の計229名分の回答データを用いて行った。また、欠損値は分析から除外した。

街中での話しかけへの態度の因子構造

Time 1の回答を用いて分析した。項目の偏向状況を算出し、一つの選択肢に70%以上の分析対象者が回答した項目を確認した。確認の結果、そのような項目はみられなかったため、全15項目を用いてEFAを行った。初期解を重みなし最小2乗法によって求めた結果、固有値の減衰状況(6.22, 1.80, 1.02, …)から2因子構造が妥当であると判断し、再度EFA(重みなし最小2乗法, *promax* 回転)を実施

した。因子負荷量が.40に満たない項目を削除してEFAを繰り返した結果、最終的に13項目が残った(Table 2)。第1因子は“街中での話しかけは、非常識な行為である”などに対して負荷量が高いことから、“話しかけへの嫌悪”と命名した。第2因子は“街中での話しかけは、対人関係をつくるきっかけになる”などに対して負荷量が高いことから、“対人関係構築のきっかけ”と命名した。なお、回転前の累積寄与率は、56.3%であった。

街中での話しかけへの態度の性差

Time 1の回答を用いて分析した。街中での話しかけへの態度の各因子の得点に性差があるかを確認するために、調査参加者の性を参加者間要因、各因子を参加者内要因とする2要因分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であったため($F(1,257) = 13.66, p < .001, \eta^2_p = 0.05$)、単純主効果の検定を行った。その結果、調査参加者の性の単純主効果は、話しかけへの嫌悪($F(1,257) = 8.79, p < .01, \eta^2_p = 0.03$)、対人関係構築のきっかけ($F(1,257) = 11.43, p < .001, \eta^2_p = 0.04$)ともに有意であり、女性は男性に比べ、話しかけへの嫌悪が高く、対人

Table 2
街中での話しかけへの態度のEFA結果(重みなし最小2乗法, *promax* 回転)

質問項目	因子		M	SD
	1	2		
話しかけへの嫌悪 ($\alpha = .87$)				
2 街中での話しかけは、非常識な行為である	.85	.17	3.08	1.00
5 街中での話しかけは、迷惑さわまりない	.81	.03	3.08	1.01
6 街中での話しかけには、気持ち悪さを感じる	.79	.11	3.48	1.10
15 街中で話しかけたり、話しかけに対応したりするのはやめた方がいい	.66	-.15	2.88	0.89
7 街中での話しかけは、悪いことではない	-.65	.14	3.27	0.88
9 街中での話しかけは、理解できない行為である	.65	-.15	2.73	1.08
8 街中で話しかけをしたい、あるいは、話しかけに対応したいという考えには同意できない	.58	-.14	3.05	1.20
11 下心のない、街中での話しかけは存在する	-.51	-.12	3.19	1.27
対人関係構築のきっかけ ($\alpha = .78$)				
14 街中での話しかけは、対人関係をつくるきっかけになる	.12	.87	3.23	0.95
1 街中での話しかけは、人脈を広げると思う	.13	.76	2.90	1.16
3 街中での話しかけが、運命の出会いになることもある	.04	.58	3.21	1.08
13 知り合いになるためなら、街中で話しかけをしたり、話しかけに対応したりするのは構わない	-.18	.55	3.01	1.08
10 対人関係を作る手段としては、街中での話しかけは不適切である	.25	-.44	3.07	1.03
因子間相関				
	1	2		
	1	-	-.54	

削除された項目：その場が楽しくなるなら、街中での話しかけは良いことである
街中での話しかけが良い思い出になることもある

関係構築のきっかけは低かった (Figure 1)。また、街中での話しかけへの態度の因子の単純主効果は、女性では有意傾向 ($F(1,153) = 2.81, p < .10, \eta^2_p = 0.01$)、男性では有意 ($F(1,104) = 9.99, p < .01, \eta^2_p = 0.07$) であり、女性では、対人関係構築のきっかけより話しかけへの嫌悪の方が高く、男性はその逆であった (Figure 1)。

因子的妥当性の確認

Time 2の回答を用いて分析した。“話しかけへの嫌悪”と“対人関係構築のきっかけ”という2因子を仮定して確認的因子分析 (CFA: Confirmatory Factor Analysis) を実施した結果、適合度指標は $\chi^2(64) = 165.65 (p < .001)$ 、GFI = .99、AGFI = .99、CFI = .93、RMSEA = .08であった。

街中での話しかけへの態度の時間的一定性の確認

Time 1とTime 2の両方に参加した調査参加者の回答を用いて分析した。各因子に含まれる項目の合計点を算出し、それを項目数で除した値をTime 1、Time 2別に算出した。なお、因子分析で負の因子負荷を示した項目は逆転処理を行った。その後、Time 1とTime 2の対応する因子同士のPearsonの相関係数を算出した結果、“話しかけへの嫌悪”、“対人関係構築のきっかけ”ともに高い正の相関係数が示された ($r(153,151) = .83, .77, ps < .001$)。なお、Time 2の“話しかけへの嫌悪”、“対人関係構築のきっかけ”それぞれの α 係数は、 $\alpha = .90, .77$ であった。

街中での話しかけへの態度と街中での話しかけの行為者への印象との関連

Time 1の回答を用いて分析した。まず、街中で

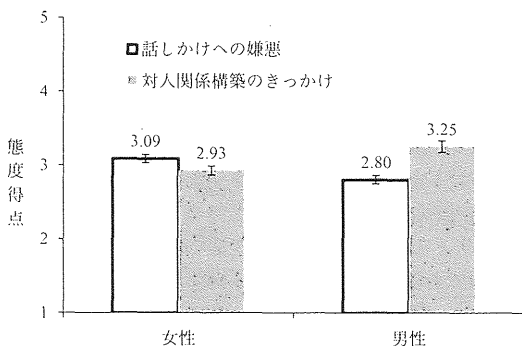


Figure 1. 街中での話しかけへの態度の性差。エラーバーは標準誤差。女性 $n = 154$ 、男性 $n = 105$ 。

の話しかけの行為者への印象に関する項目に対しEFAを行った。初期解を重みなし最小2乗法によって求めた結果、固有値の減衰状況 (7.11, 5.08, 2.47, ...) および解釈可能性から2因子構造が妥当であると判断し、再度EFA (重みなし最小2乗法, varimax回転) を実施した。因子負荷量が.40に満たない項目や複数の因子に高い負荷量 (.30を基準) を示した項目を削除して再度EFAを繰り返した結果、最終的に22項目が残った (Table 3)。第1因子は、“温かい”、“役に立つ”などに対して負荷量が高いことから、“理想的な男性像”と命名した。第2因子は、“大胆な”、“おしゃべりな”などに対して負荷量が高いことから、“自分勝手な男性像”と命名した。

これらの因子と街中での話しかけへの態度の各因子との関連を検討するため、Pearsonの相関係数を性別に算出した (Table 4)。その結果、男女ともに、話しかけへの嫌悪は、理想的な男性像と負の相関関係 ($r(103,147) = -.34, -.22, p < .001, .01$) が、自分勝手な男性像と正の相関関係 ($r(101,148) = .36, .49, p < .01, .001$) が示された。一方、対人関係構築のきっかけは、男女ともに理想的な男性像と正の相関関係 ($r(102,146) = .43, .48, ps < .001$) が示されたが、自分勝手な男性像とは女性のみで負の相関関係 ($r(147) = -.20, p < .05$) が示された。

街中での話しかけへの態度とパーソナリティとの関連

Time 1の回答を用いて分析した。街中での話しかけへの態度の各因子とECR-GOの各因子、BIS/BAS尺度の各因子とのPearsonの相関係数を性別に算出した (Table 4)。その結果、女性において、話しかけへの嫌悪は、BIS3と有意な正の相関関係 ($r(150) = .31, p < .001$)、BAS3と有意な負の相関関係 ($r(151) = -.17, p < .05$) が示され、対人関係構築のきっかけは、BIS3と有意な負の相関関係 ($r(149) = -.19, p < .05$) が示された。また、男性では、話しかけへの嫌悪は、Avoidance, BIS3と有意な正の相関関係 ($r(101,104) = .20, .24, ps < .05$)、BAS3と有意な負の相関関係 ($r(103) = -.19, p < .05$) が示され、対人関係構築のきっかけは、BAS1, BAS2, BAS3と有意な正の相関関係 ($r(104,104,103) = .26, .21, .27, p < .01, .05, .01$)、BIS3と有意な負の相関関係 ($r(103) = -.26, p < .01$) が示された。

Table 3
街中での話しかけの行為者（男性）への印象のEFA結果
(重みなし最小2乗法, *varimax* 回転)

質問項目	因子		h^2	M	SD
	1	2			
理想的な男性像 ($\alpha = .88$)					
17 温かい	.69	-.15	.34	3.40	1.25
9 役に立つ	.69	-.20	.41	3.24	1.27
27 心のひろい	.66	.05	.32	3.94	1.21
7 思いやりのある	.63	-.27	.22	2.90	1.20
5 発想力豊かな	.63	.13	.38	3.85	1.37
12 判断力のある	.59	-.16	.50	3.46	1.36
20 協調的な	.59	.06	.35	3.93	1.44
6 情にもろい	.59	-.08	.22	2.98	1.17
22 器量のよい	.58	.12	.35	4.31	1.42
23 親しみやすい	.57	.07	.33	4.79	1.33
28 影響力のある	.57	.15	.49	4.14	1.33
10 独創的な	.56	.05	.43	3.74	1.35
自分勝手な男性像 ($\alpha = .81$)					
25 大胆な	.15	.73	.35	5.98	0.94
26 おしゃべりな	.13	.69	.18	5.98	0.94
32 うぬぼれた	-.01	.68	.47	5.02	1.23
33 積極的な	.17	.63	.20	6.16	0.86
4 ふまじめな	-.21	.54	.35	5.20	1.10
24 主張的な	.20	.49	.46	5.31	1.06
21 傲慢な	-.02	.47	.51	4.62	1.27
11 節操がない	-.11	.45	.28	5.16	1.28
29 臆病な ^{a)}	.03	-.42	.56	1.91	1.03
2 慎重な ^{a)}	.18	-.41	.43	2.12	1.22
因子寄与	4.73	3.42			
累積寄与率 (%)	21.48	37.01			

^{a)} 逆転項目

街中での話しかけへの態度と街中での話しかけに関する行動意図および頻度との関連

Time 2の回答を用いて分析した。街中での話しかけへの態度と街中での話しかけに関する行動意図との関連を検討するため、*Pearson*の相関係数を性別に算出した (Table 5)。その結果、男女ともに、話しかけへの嫌悪と話しかけられたい ($r(85,135) = -.47, -.28, p < .001, .01$) および話しかけたい ($r(85,134) = -.46, -.44, ps < .001$) という行動意図との間に負の相関関係が示された。また、対人関係構築のきっかけは、男女ともに、話しかけられたい ($r(86,135) = .40, .36, ps < .001$) および話しかけたい ($r(86,134) = .40, .36, ps < .001$) という行動意図と正の相関関係が示された。

また、街中での話しかけへの態度と実際に話しか

けられたあるいは話しかけた頻度との関連を検討した。なお、話しかけられた頻度に関しては、女性の約7割は経験がある一方、男性は約4割しか経験がなく、また、話しかけた頻度に関しては、女性は約1割、男性は約3割が話しかけた経験があった (Table 6)。性別に*Pearson*の相関係数を求めた結果、話しかけへの嫌悪は、男女ともに話しかけた頻度と負の相関関係 ($r(85,134) = -.36, -.27, ps < .01$) が示され、対人関係構築のきっかけは、男女ともに話しかけた頻度と正の相関関係 ($r(86,134) = .26, .19, ps < .05$) が示された (Table 5)。

態度は行動意図を介して行動を規定するのか

Time 2の回答を用いて分析した。計画行動理論 (Ajzen, 1991) に基づき、態度が行動意図を介して

Table 4
街中での話しかけへの態度と街中での話しかけの行為者への印象、
ECR-GO, BIS / BAS 尺度との相関係数

	街中での話しかけへの態度			
	話しかけへの嫌悪		対人関係構築のきっかけ	
	女性	男性	女性	男性
街中での話しかけの行為者(男性) への印象				
理想的な男性像	-.22**	-.34***	.48***	.43***
自分勝手な男性像	.49***	.36**	-.20*	-.14
ECR-GO				
Avoidance	-.03	.20*	.02	-.06
Anxiety	.15†	.09	.07	-.02
BIS / BAS 尺度				
BIS1	.15†	.13	.09	-.11
BIS2	.07	.01	-0.00	.10
BIS3	.31***	.24*	-.19*	-.26**
BAS1	-.03	-.11	.10	.26**
BAS2	0.00	-.06	.10	.21*
BAS3	-.17*	-.19*	.14†	.27**

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

Table 5
街中での話しかけへの態度と話しかけに関する行動意図、話しかけに関する頻度との関連

	街中での話しかけへの態度									
	女性					男性				
	$n^{a)}$	M	SD	話しかけへの嫌悪	対人関係構築のきっかけ	$n^{a)}$	M	SD	話しかけへの嫌悪	対人関係構築のきっかけ
話しかけに関する行動意図										
話しかけられたい	137	1.49	0.68	-.28**	.36***	88	2.00	0.90	-.47 ***	.40***
話しかけたい	136	1.29	0.58	-.44***	.36***	88	1.89	0.96	-.46 ***	.40***
話しかけに関する頻度										
話しかけられた頻度	-	-	-	-.07	.03	-	-	-	-.02	-.04
話しかけた頻度	-	-	-	-.27**	.19*	-	-	-	-.36 **	.26*

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

^{a)} 欠損値を除去した値

Table 6
話しかけられた頻度および話しかけた頻度の割合

	話しかけられた経験				話しかけた経験			
	女性		男性		女性		男性	
0回	26.3%	(36)	59.1%	(52)	89.0%	(121)	75.0%	(66)
1回	16.8%	(23)	12.5%	(11)	2.2%	(3)	3.4%	(3)
2-5回	46.0%	(63)	20.5%	(18)	5.9%	(8)	10.2%	(9)
6-9回	4.4%	(6)	2.3%	(2)	2.2%	(3)	3.4%	(3)
10回以上	6.6%	(9)	5.7%	(5)	0.7%	(1)	8.0%	(7)

注) () は該当頻度に回答した調査参加者の度数

行動を規定するのかを検討するため、“街中での話しかけへの態度→話しかけたいという行動意図→話しかけた頻度”というモデルに対し、R-3.0.2のlavaan 0.5-15パッケージを用いて、共分散構造分析によるパス解析を性別に行った (Figure 2)²⁾。なお、分析の際、使用する変数はすべて標準化を行った。パス解析の結果、女性において、話しかけへの嫌悪は、話しかけたいという行動意図を低める ($b^* = -.40, p < .001$) 一方、対人関係構築のきっかけは、話しかけたいという行動意図を高めていた ($b^* = .20, p < .05$)。加えて、話しかけたいという行動意図は、話しかけた頻度を高めていた ($b^* = .62, p < .001$)。また、男性においても同様で、話しかけへの嫌悪は、話しかけたいという行動意図を低める ($b^* = -.32, p < .05$) 一方、対人関係構築のきっかけは、話しかけたいという行動意図を高めていた ($b^* = .22, p < .10$)。加えて、話しかけたいという行動意図は、話しかけた頻度を高めていた ($b^* = .57, p < .001$)。

2) ここで、話しかけたいという行動意図と話しかけた頻度しか扱わなかったのは、話しかけられたいという行動意図はどちらかという願望に近いためであり、また、話しかけられた頻度は話しかけられたい行動を表しているとは考えにくいためであった。すなわち、話しかけられたい行動とは、たとえば、相手に目配せをするなどが考えられるが、話しかけられた頻度では、そのような行動を行ったかどうか分からないと考えられたため、分析を行わなかった。

話しかけへの嫌悪あるいは対人関係構築のきっかけが、話しかけたいという行動意図を介して、話しかけた頻度を規定しているのかをブートストラップ法 (百分位数法, リサンプリング2000回) によって性別に検討した。その結果、女性においては、話しかけへの嫌悪 (95%CI: -0.453~-0.121)、対人関係構築のきっかけ (95%CI: 0.021~0.327) とともに95%信頼区間が0を含んでおらず、有意な媒介効果が示された。男性においては、話しかけへの嫌悪 (95%CI: -0.365~-0.041) のみで有意な媒介効果が示されたが、対人関係構築のきっかけでは、有意な媒介効果が示されなかった。

なお、上記のパス解析では、話しかけへの嫌悪と対人関係構築のきっかけの交互作用項をモデルに含めた。女性においてのみ、話しかけたいという行動意図に対する交互作用項のパス係数が有意であったため ($b^* = -.24, p < .01$)、単純傾斜分析を行った。その結果、話しかけへの嫌悪が低い女性の場合、対人関係構築のきっかけという態度が話しかけたいという行動意図に影響を及ぼす ($b^* = .44, p < .001$) が、話しかけへの嫌悪が高い女性の場合、話しかけたいという行動意図に対する対人関係構築のきっかけという態度の影響は示されなかった ($b^* = -.04, ns$)。

考 察

本研究の目的は、第一に、街中での話しかけへの

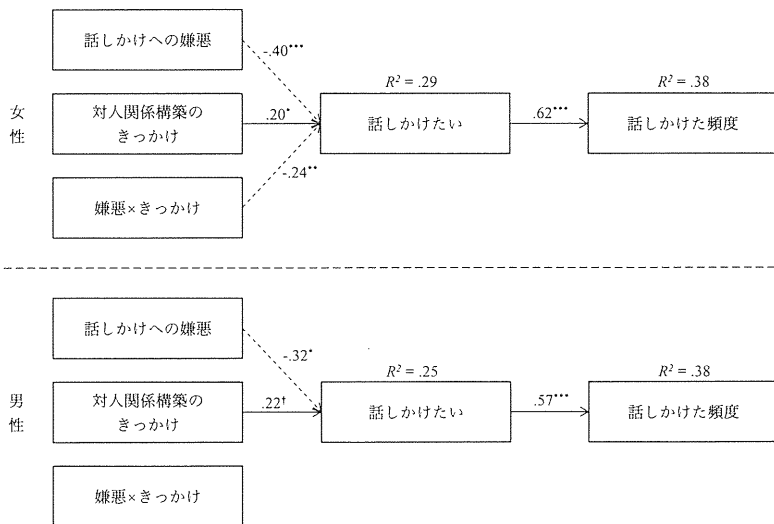


Figure 2. 街中での話しかけに関する態度と行動意図、頻度との関連についてのパス解析結果。有意あるいは有意傾向のパスのみ表示し、実線は正、破線は負の標準偏回帰係数を表す。

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

態度を検討すること、第二に、街中での話しかけへの態度と話しかけの行為者への印象との関連を検討すること、第三に、街中での話しかけへの態度とパーソナリティとの関連を検討することであった。

予備調査およびEFAの結果から、街中での話しかけへの態度には、話しかけを非常識な行為や迷惑な行為と捉える否定的態度と対人関係構築のきっかけと捉える肯定的態度が存在することが確認された。これは、街中での話しかけが、犯罪の発端となりうるという側面と、異性関係構築のきっかけとなりうるという側面とがあることを反映したものと考えられる。また、これらの態度を測定する各項目の平均値は、理論的中央値付近をとっており、街中での話しかけに対して、否定的態度も肯定的態度も、同程度に有していると考えられる。加えて、態度の性差を検討した結果から、女性は話しかけに対して比較的否定的な態度を有している一方、男性は肯定的な態度を有していた。これは、女性の多くが明らかに性的な誘いを意図した男性から話しかけられた経験があり、そのような経験は女性にとってネガティブである(Sakaguchi & Hasegawa, 2007)ためであろう。

街中での話しかけへの態度と行為者の印象との関連を検討した結果では、街中での話しかけに対して否定的な態度を有するほど、街中で話しかけを行う男性に対して“自分勝手な男性”という印象をもち、街中での話しかけに対して肯定的な態度を有するほど、街中で話しかけを行う男性に対して“理想的な男性”という印象をもっていた。これらは、本研究で測定された街中での話しかけへの態度が妥当性を有することを示す証拠の一つであり、本研究で作成された街中での話しかけへの態度を測定する尺度が妥当である可能性を示唆するものと考えられる。

また、街中での話しかけへの態度と一般他者への愛着スタイルとの関連を性別に検討した結果、女性においては、予測通り、話しかけへの嫌悪とAnxiety(見捨てられ不安)との間に正の相関関係が示された一方、男性においては、話しかけへの嫌悪は、Avoidance(親密性回避)と正の相関関係が示された。このような違いが見られた原因としては、街中での話しかけの行為者へのイメージが挙げられる。男女の話しかけられた経験および話しかけた経験を比べると、女性の方が話しかけられた経験が多い一方で、話しかけた経験は少ない。この結果から、街中での話しかけの行為者は主に男性であると一般的に捉えられている可能性がある。そうであれば、街中での話しかけは心理的親密性を求める行為とも考えられるため、心理的な親密性に対する不

快で規定されるAvoidanceの高い男性にとって、街中での話しかけは不快な行為であると考えられる。そのため、男性においては、話しかけへの嫌悪とAvoidanceとの間に正の相関関係がみられたのであろう。

また、街中での話しかけへの態度とBIS/BASとの関連を性別に検討した結果、女性においては、予測通り、話しかけへの嫌悪とBIS1(懸念・罰感受性)、BIS3(抑制性)との間に正の相関関係、対人関係構築のきっかけとBAS3(新たな報酬体験の追求)との間に正の相関関係が示された。一方で、話しかけへの嫌悪とBIS2(回避ドライブ)、対人関係構築のきっかけとBAS1(接近ドライブ)、BAS2(報酬応答性)との間に関連はみられず、話しかけへの嫌悪とBAS3、対人関係構築のきっかけとBIS3との間に関連がみられた。また、男性においては、予測通り、話しかけへの嫌悪とBIS3との間に正の相関関係、対人関係構築のきっかけとBAS1、BAS2、BAS3との間に正の相関関係が示された。一方で、話しかけへの嫌悪とBIS1、BIS2との間に関連はみられず、話しかけへの嫌悪とBAS3、対人関係構築のきっかけとBIS3との間に関連がみられた。男女ともに、話しかけへの嫌悪とBAS3との間に関連がみられたのは、BAS3が、新たな報酬体験の追求を反映する因子であるため、BAS3が高い人は、ネガティブな側面(すなわち、罰に関する側面)に着目しづらいと考えられる。そのため、話しかけへの嫌悪とBAS3との間には負の相関関係がみられたのであろう。また、男女ともに、対人関係構築のきっかけとBIS3との間に関連がみられたのは、BIS3が抑制性を反映する因子であるため、BIS3の高い人は対象(本研究においては、街中での話しかけ)を良いものとして評価しにくいと考えられる。そのため、対人関係構築のきっかけとBIS3との間に負の相関関係がみられたのであろう。加えて、女性においては、話しかけへの嫌悪とBIS2との間、対人関係構築のきっかけとBAS1、BAS2との間、男性においては、話しかけへの嫌悪とBIS1、BIS2との間に、予測された関連がみられなかった。この点については、本調査だけでは説明がつけられず、今後の検討が必要である。

また、街中での話しかけへの態度と話しかけに関する行動意図との関連を検討した結果、男女ともに、話しかけを嫌悪しているほど話しかけられたい、話しかけたいと思わず、対人関係構築のきっかけと思っているほど、話しかけられたい、話しかけたいと思っていることが示された。計画行動理論(Ajzen, 1991)では、態度は行動意図に影響するた

め、この結果は、妥当であると考えられる。また、街中での話しかけへの態度と話しかけに関する頻度との関連を検討した結果では、男女ともに、街中での話しかけへの態度は話しかけられた頻度と関連しない一方、話しかけた頻度は、話しかけへの嫌悪と負の相関関係、対人関係構築のきっかけと正の相関関係を示した。話しかけられたことによって、良い体験もしたこともあれば、悪い体験をしたこともあるために、話しかけられた頻度と街中での話しかけへの態度との間には関連が示されなかった可能性が示唆される。

加えて、計画行動理論 (Ajzen, 1991) に従い、態度が行動意図を介して行動を規定するかを検討した結果、男性では、一部媒介効果が示されなかったものの、街中での話しかけへの態度は、話しかけたいという行動意図を介して、話しかけた頻度に影響することが示された。また、女性においては、話しかけへの嫌悪と対人関係構築のきっかけの交互作用が、話しかけたいという行動意図に影響していた。すなわち、話しかけへの嫌悪が高い女性は、対人関係構築のきっかけの高さに関わらず、話しかけたいと思にくい一方、話しかけへの嫌悪が低い女性は、対人関係構築のきっかけが高い場合にだけ、話しかけたいと思やすかった。この結果から、女性が、街中での話しかけを行うかどうかを決定する際には、話しかけに対する否定的な態度が前提にあることが推察される。すなわち、女性が男性に話しかけることに関しては、話しかけは否定的な行為と評価しているかどうかが最も重要であり、否定的な態度が低い場合に、その他の態度が、話しかけを行いたいと思う程度に関与するという可能性が示唆される。しかし、計画行動理論 (Ajzen, 1991) では、態度のほかに、主観的規範 (Subjective norm)、統制可能性 (Perceived behavioral control) も行動意図を介して、行動を予測するとされている。そのため、今後は、主観的規範および統制可能性を加えた検討が必要であろう。

引用文献

- Ajzen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, *50*, 179-211.
- Clark, R. D., & Hatfield, E. (1989). Gender differences in receptivity to sexual offers. *Journal of Psychology and Human Sexuality*, *2*, 39-55.
- 林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), *25*, 233-247.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (編) (2012a). 第14回出生動向基本調査 (結婚と出産に関する全国調査) —第I報告書—わが国夫婦の結婚過程と出生力 国立社会保障人口問題研究所 2012年3月30日 <<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/207616.pdf>> (2014年2月26日)
- 国立社会保障・人口問題研究所 (編) (2012b). 第14回出生動向基本調査 (結婚と出産に関する全国調査) —第II報告書—わが国独身層の結婚観と家族観 国立社会保障人口問題研究所 2012年3月30日 <<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/207750.pdf>> (2014年2月26日)
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, *5*, 19-27.
- Rholes, W. S., & Simpson, J. A. (Eds.) (2008). *Adult Attachment: Theory, Research, and Clinical Implications*. New York: Guilford Press.
- (ロールズ, W. S., & シンプソン, J. A. (編) 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) (2004). 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床— 北大路書房)
- 坂口菊恵 (2012). ナンパを科学する 思春期学, *30*, 22-28.
- Sakaguchi, K., & Hasegawa, T. (2007). Personality correlates with frequency of being targeted for unexpected advances by strangers. *Journal of Applied Social Psychology*, *37*, 948-968.
- Tombs, S., & Silverman, I. (2004). Pupillometry: A sexual selection approach. *Evolution and Human Behavior*, *25*, 221-228.
- 安田朝子・佐藤 徳 (2002). 行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性の検討 心理学研究, *73*, 234-242. (受稿3月31日: 受理5月29日)